ラプンツェルにさよなら

みどり風香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラプンツェルにさよなら

【Ｎコード】
Ｎ２７０７Ｑ

【作者名】
みどり風香

【あらすじ】
森の向こうには、魔女が住んでいる――。そんな怪談めいた噂は本当だった。魔女は小さな兄弟を助ける代わりに、二人の拾った赤子をもらい受けた。魔女によって育てられた赤子はすくすくと成長し、やがて十五の少年となった。少年エミリオは、魔女の言いつけを守って、ずっと魔女屋敷にこもっていた――

森の向こうの魔女

その兄弟は、赤子を大切そうに抱えていた。どこの子か分からない。紛争に巻き込まれたあの村から逃げてくる時、道ばたに捨てられていたのを、弟のユウヤが拾った。兄のソールはそれをとがめるでもなく、ただ守る者が増えて、いっそう兄としての責任感を自覚した。ふたりの兄弟の故郷、グリニッジ村は、紛争に巻き込まれて人が住めるような場所ではなくなってしまった。今まで、診療所を経営している優しい父母と一緒に、質素ながらも幸福な生活を過ごしていたふたりにとって、この戦火はあまりに重くのしかかる運命だった。それでも、父母が命をかけて守ってくれた命を無駄にはするまいと、村を出て森林をさまよい歩いた。その際、ソールは夜盗に襲われ足を怪我した。兄の威厳にかけて、弟の前では決して弱音を吐かなかった。

「ユウヤ、ぼーず、もうすぐ森を抜けるぞ。あとちょっとの辛抱だ」

ソールは二人を励ました。泣きそうになるのをこらえ、赤子を抱く力を強くする。右肩には、兄の左手がずしんと置かれている。両手ふさがりの状態だが、ユウヤは自分の肩を兄の杖代わりにした。兄の励ましに、強く頷く。

重い体を引きずりながら、小さな兄弟と赤子はどうにか森を脱け出すことに成功した。さんざん迷いながら、野獣や魔物を追い払いながら、小さな子供が小さな知恵を働かせて、やっと、迷路を抜け出した。

「ああ、ソール。月だよ！」

ユウヤは感激して、月を指さした。満月は、辺りを強く照らしている。

「ほんとだ。キレイだな」

「ソール、大丈夫？　足、痛む？」

へいきへいき、と笑ってみせるつもりが、ソールはその場に崩れ

落ちた。兄の、虚勢とも言える威厳は、ここで脆く崩れた。
「ソール！」
ユウヤは赤子を緑茂る草の上にそっと寝かせ、ソールの足を診る。血がどす黒く染まっていて、ふくらはぎを覆っている。ソールは傷の痛みに耐えながら、傷口を乱暴に手で押さえつけた。
「痛いの！？」
「ああ、ちょっと……こらユウヤ、ぼーずを置いちゃだめだろ」
「わかってるよ！　けど、ソール、はやく手当てしないと……」
「そうだな」
ユウヤは森を抜けたすぐそこに、丁度よく建てられていた小屋に、ソールを運び込んだ。赤子も小屋へ運ぶ。
ふたりの持ち物は、何もない。あるとすれば、途中で拾った赤子だけだ。医者として働く父母を診ていたからだろうか、ユウヤはソールの傷が決して軽くないと見切っていた。しかし、それを治療するための設備や道具は、ない。
「ソール、赤ちゃん見てて。俺、薬草探してくる！」
「あ、こら！」
ユウヤはソールの制止も聞かず、小屋を飛び出した。森に入らぬよう、小屋の周りを注意深く探っている。傷を癒せそうなものは、近くにはない。思い切って遠くを探す。
小屋の裏口方面に、まっすぐと伸びる道があった。その一本道は、木々が作ってくれたのだろうか、それらがアーチ状になってトンネルのような姿をしていた。そのトンネルをくぐり抜けると、もう一軒、家があった。
それは、ソール達を置いてきた小屋とは比べものにならないほど豪華で壮大だった。その大屋敷に住む人に薬を分けてもらおうとしたが、ユウヤは父母に聞かされた話を思い出して、思わず足を止めた。
『森を抜けるとね、そのもっと向こうに木のトンネルがあるの。そのトンネルの向こうにはね、魔女が住んでいる大屋敷があるんで

すって』
母の怪談話に通じる話に、確かな恐怖を覚えた。
大屋敷の窓から、ほんのりとオレンジ色の灯りが漏れている。庭園には数え切れない植物が植えられていて、美しく咲いている花が今は不気味だった。
多分、ここには魔女が住んでいる。母は魔女が住んでいるとだけ話して、魔女がどういう者なのかは教えなかった。
ソレが何なのか得体が知れないという類の恐怖は、多くの恐怖心に勝る。ユウヤは、足がすくんで動けなくなるのを感じた。魔女は実は慈悲深くて、正直に兄を助けて欲しいと言ったら案外助けてくれるかも知れない。でも、その逆だったら？　自分は悪魔を召喚するための生け贄にされてしまうかも知れない。
怖がっている暇はない。ソールの一大事なのだ。ソールを助けるためなら、魔女にだって立ち向かってやる。
「ごっ……ごめん下さい」
思い切って、扉を叩く。こんな小さな声ではきっと届かない。もう一度、さっきより大きな声で助けを求めた。
「ごめん下さい！　た、助けて。兄さんが大けがして、大変なんだ！　本当に魔女なら、助けて！！」
声は次第に狂気を帯び、がむしゃらに扉を小さな手で叩く。
「助けて！　ソールが死んじゃう！！」
静かに、扉が開かれた。
応対した者は、少なくともユウヤの想像していた『魔女』ではなかった。焦げ茶の色をした髪は所々はねていて、田舎者のような服で身を包んだ、まだ十代半ばの少年だった。少年は泣きそうになっているユウヤを見下ろして、事態をそれとなく把握した。
「どちら様ですか」
「え、えっと……森を抜けたずっと向こうの村の」
「ああ、なるほど。で、怪我がどうのと叫んでいましたが？」
魔女とはほど遠そうな少年に確かに安堵し、ユウヤはすがりつく。

「あっちの小屋に、足を怪我した俺の兄さんがいるんだ。助けて欲しいんだ」
「そうですか。では、案内してもらえますか。薬草、持って行きますので」
少年は案外好意的だった。しかも、怪我を手当てする技術も持っている。これで、ソールは助かる。ユウヤは夢中で、少年を小屋へと導いた。小屋には、赤子を大切に抱えている兄がいた。
「ソール！」
「ユウヤ、無事だったのか」
ソールは足の痛みを無視して、弟の生還を心から喜んだ。
「お取り込み中失礼」
感動の再会を遮り、少年はソールの足を診た。血は止まっているが、固まった血がどす黒く変色している。
「少しだけしみますよ」
薬粉をまぶすと、ソールはぎゅっと目を閉じた。しみると言うから身構えたが、言われるほどしみるものでもなかった。少年は首に巻いていたバンダナで、患部を覆う。
「これで大丈夫でしょう」
弟は、その場に座り込んだ。兄の身の危険はもう去ったことに安心して、力が抜けてしまった。
少年は、兄弟にはもう興味がなく、兄が抱いている赤子に興味を抱いていた。
「君、その子は？」
「へ？　あ、村に捨てられてたのを拾ったんだ」
「その子の名前は？」
「村を出て来る時に、エミリオって名付けた」
「名字は？」
「村の名前からとって、グリニッジにしようって、ユウヤと二人で」
「なるほど」
少年はしゃがみ込んで、ソールと目線を会わせる。

「君、その赤子を僕によこして下さい」
「な、なんで？」
「僕はタダでは動きません。何かしらの代金がないと」
ユウヤは、自分の考えの甘さを呪った。あの、噂の大屋敷に住んでいたのが少年だったからといって、その人が魔女ではない保証はどこにもないのだ。よく考えたら、男も『魔女』と呼ばれるのだ。
「ま、待って。俺をどうしてもいいから、二人は見逃して」
「だめです。僕はこの赤子をもらい受けます」
少年は、ユウヤとソールにいくら懇願されても、折れることはなかった。諦めた兄弟は、せめて大切に育てて欲しいと頼んだ。魔女の少年は、「もちろんです」と、快諾した。
「さて、赤子を譲り受けた礼と言ってはなんですが、お二方、ちょっと目を閉じて頂けませんか？」
兄弟は素直に従った。視界が暗くなっただけで、何が変わるというわけでもなかった。それは、少年が「もういいですよ」と目を開けさせた後も同じだった。
「村に戻って見るといいでしょう」
そう言い残して、魔女の少年は小屋を後にした。はっとしたユウヤは、慌てて視界から消えた少年を追いかけたが、もうどこにもいなかった。

森の向こうの魔女（後書き）

ラプンツェルのような、狭い建物に閉じ込められた者のお話を書きたくなってしまってできた産物。籠の中の鳥って何だか幻想的でロマンあふれるテーマですね。

風に乗ってきたもの

――この館から出てはいけない。

エミリオは、物心ついた時からずっと傍にいる少年エルクに、そう言いつけられてきた。それがどうしてなのか聞くと、外には世にも恐ろしい魔物が蔓延っていて、人間を食べてしまうのだとか。エミリオはそんなのに食べられたくなかったし、特にこれといってお屋敷を出たいという願望もあるでもなかったので、忠実にエルクの言いつけを守っていた。外に出ることはあるが、お屋敷内の庭の花壇を手入れする程度で、お屋敷の門から外へは一度も出たことがない。自分の部屋の窓から外を眺めることはあっても、その外をもっと間近で見たいという願いは現れなかった。

「エミリオ」

部屋に、エルクが入ってきた。十三四年経っても、エルクの容姿は変わらない。エミリオが赤子の時、エルクは自分を引き取ってくれたらしい。まだ年若な少年なのに、ずっとエミリオに尽くしている。その献身は見事なもので、エミリオの育て親という範囲をゆうに超えている。エミリオの着る服から髪をくしけずること、眠れないとだだをこねたら、ずっと付き添ってくれる。エミリオは、エルクに申し訳がなかった。そのことを遠回しに話すと、「好きでやっていることですから」と微笑まれた。

「エルクは、自分のことに熱中してもいいんじゃないかな」

「してますとも。庭の花壇に植えてある薬草を栽培するとか、街に出て不足のものを買いに出かけたりとかね」

「外は魔物でいっぱいなんでしょ？　怖くない？」

「僕は自衛の手段をある程度持っていますから」

「じゃあ、僕も自分のことは自分でやれるようになれば、少しはエルクの負担も減らしてあげられるかな」

「別に負担だと思っていませんよ。エミリオはそのままでも構いま

せん。……さあ、僕は外へ出なければなりませんから、留守番を頼みますね」

エルクはエミリオの部屋を出て行った。昼下がりになると、こうしてティータイムがてら他愛もなく雑談をする。たまに勉強を見てもらうこともある。庭の薬草採取を手伝わせてもらうこともある。夜は食事をして、湯を浴びて、少し話して眠る。エミリオの毎日は驚くほど変化がない。それを、エミリオ本人が疑問に思うこともない。

この屋敷を中心としたある範囲には、誰も人が入ってこない。エルクが魔除けとして結界を張っているためである。この魔除けは人間にも効果があるようで、エミリオがたまに窓から屋敷の門を眺めることがあるが、一度として自分とエルク以外の者を見かけることはなかった。ここは、外と完全に近い形で切り離された、また別の世界なのだ。外の世界とは違う。この世界にいるのは、エミリオとエルクだけ。エミリオは、かつて自分を拾ってくれた小さな兄弟のことを忘れている。

そろそろ日の落ちる頃、本を読むのも飽きて、窓からお屋敷の門の方を見下ろす。退屈になると、無意識に、こうして門を眺めるようになった。エミリオ本人は、危険を冒してまで門の向こうへ行こうとは思っていない。それなのに、どうして門の方を眺めるのか分からない。

もしかしたら、誰かが迷い込んで来てくれることを望んでいるのだろうか。だけど、外の人間はみな恐ろしい者だと聞いている。エルクのいうことなら素直に信じるエミリオは、エルクに言われた恐ろしい外の人の存在を疑わない。

なのに、どうして来訪者を求めるのか、エミリオには分からない。

（書斎に、何かいい本ないかな）

別の本を求めんと、エミリオは部屋を後にしようとする。

ところが、エミリオが窓に背を向けようとする直前、屋敷の庭に強い風が吹いた。

「わっ！」
風は開かれた窓から部屋へと入り、エミリオの部屋を荒らす。結構重いのに、本が机からばさっと大きな音を立てて落ちる。せっかくまとめていた衣類もめちゃくちゃだ。
窓から身を乗り出す。こんな強くて大きな風、今までになかった。エルクの魔除けは、風に効かないようだった。
庭の花壇に植えられれた薬草たちは、風に揺られ、それでもなお立っている。当然のことながら、風が吹いたくらいで何の変化もない。変化したのは、無残にも荒れたエミリオの部屋だけだ。ため息をつき、エミリオは部屋を片づけようと向き直ろうとした。

「あれ？」

この声は、自分ではない。自分の声は、これほど低くはない。エルクも違う。エルクの声も、高い。
では、この低い声はだれのもの？
おそるおそる後ろを振り向いてみると、エルクではない、長身の人間がベッドに土足で立っていた。

風に乗ってきたもの（後書き）

ラプンツェル2話めです。ずっと家にいるだけで何もない毎日は、ある意味幸せですね。私も家に引きこもって好き放題本を読んでアニメを観たい（笑）

外の人

長身の男が、ベッドに土足で立っている。艶のある黒髪に、すこしつり上がった目、装束は本で読んだことのある異国のもの。その左手には、武器が握られている。

「あ？」

彼と、目が合った。その時、自分はどんな顔をしていたのだろう。少なくとも、彼に対して友好的な表情はしていない。武器を持っている者に、どうして笑顔をふりまける？

「なあ」

話しかけてきた。ベッドからすとんと降り、こちらに手を伸ばしてくる。エミリオは部屋のドア側に彼がいるのを恨んだ。後ろを振り向くと、あけっぱなしの窓があるだけだ。覚悟を決め、エミリオは窓枠に足をかける。三階のここから飛び降りれば、庭へと逃げられる。エミリオの頭には、逃げることしかなかった。

「お、おい！　こらちょいっと待てや！！」

右肩に圧迫感を覚える。横目で後ろを確認すると、肩を彼に掴まれている。

――まずい。つかまる。

彼の手をふりほどこうとしたが、駄目だった。彼の力は強く、エミリオの貧弱な力では抵抗できようもなかった。

「……っく、この！」

ぐっと後ろへ引き込まれ、床に背中を打ち付けた。一瞬の息苦しさに、咳き込んだ。

押し倒された。目を開けると、目と鼻の先に、あの長身の男がいる。

「ったく、何してんだ。死ぬ気かおい」

身を起こそうとしても、なぜか下半身だけは床に縫い付けられたように動かない。――馬乗りにされていた。エミリオは身をよじる

なり両腕をあばれさせるなりしてみたが、何の意味もない抵抗に終わってしまった。
あとは、目の前の男の機嫌をうかがいながら、自分に被害が及ぶのを最小限にとどめるべく、がたがたとみっともなく震えているしかない。
「おい、どうした？」
男はエミリオの状態に違和感を覚え、つとめて優しくエミリオの肩を揺する。肩から手に伝わる微かな震えは、完全に怯えていることを示してくれた。そこで気づいたのだ、少年が自分に対して恐怖を抱いていると。
「えーと、チビ。俺はお前に何もしねえよ。ほら」
馬乗りをやめ、彼はエミリオに手を差しのべる。両腕で頭をガードしながら震えていたエミリオは、両腕の隙間から男を垣間見る。彼の両手には、あの武器は握られていなかった。自分は解放されている。
外の人間は、みんな武器を持っていて、戦いに明け暮れていると本で読んだりエルクに聞いていた。この人間は、そうじゃないのだろうか。
「立てるか？」
大きくてたくましい手が、自分に差しのべられている。何の根拠もないけれど、その手が自分を引っつかんで何かしらの酷いことをしようとしているわけではないと、エミリオは感じた。それでも、未知の人間に自分から手を伸ばすというのは相当恐怖心をあおるもので、何度手を引っ込めたか忘れてしまった。そんな優柔不断な人間に、男は辛抱強く手を差しのべたまま、待ってくれている。
やっと、指先が、彼の手のひらに触れた。男はゆっくり、やさしく、エミリオの手を包み込む。そして、ぐっと引っぱってエミリオを立ち上がらせた。
「うわっ、軽いなお前。ちゃんと食ってんのか？」
それはあなたの力が単純に強いだけです。自分はきっと平均的な

体重を保持しています。そう言いたかったが未だ残る恐怖のせいでまともにしゃべれもしなかった。
男は言葉一つ発さないエミリオを不思議に思って、顔を覗き込む。
「なあ、ひょっとして、言葉が分からないのか？　それとも、しゃべれないのか？」
エミリオはぶんぶんと首を横に振る。ただ緊張して、怯えているせいで、声を出そうとすると、喉が震えて思い通りにいかないのだ。
「じゃあ、俺が何を言ってるか、分かるか？」
ゆっくり、言葉をしっかりと発音しながら、聞いてくる。エミリオを覗き込んだその目は心配そうに揺らいでいる。エミリオは、少しだけ警戒を解いた。今度は、ぎこちなくなりつつも頷いた。
「しゃべれるか？」
また、頷いてみせる。
「そか、よかった」
男は安堵して微笑んだ。エミリオは、それを上目遣いでうかがう。外から来た人間なのに、こうして笑うのは、どうしてだろう。
「どうして」
やっと、声が出た。満足に一文を創り出すことはできなかったけれど。相手に意志をきちんと伝えられるような言葉ではなかったけれど。
「うん？」
「どうして、笑うの？」
エミリオを見下ろす彼は、きょとんとしていた。
「今は、どうして、そんなかおをしてるの？」
「へえ？　なぜって、言われたってよ……」
「外の人は、みんな、そんな顔をするの？」
「外？」
「お屋敷の外」
エミリオは屋敷の門を指さした。
「んー……なあ、質問に質問で返すのは悪いんだが、お前、この屋

敷から出たことないのか？」
「ないよ。生まれてからずっとここで暮らしてる」
「なるほどなあ……」
男は頭をがしがしと掻き、ため息をついた。
「あ、質問には答えるぜ。お前の言う外がどういうもんか知らねえが、人間てのは笑いもすりゃ困りもすんのさ。そういうもんだ。覚えとけ」
「うん。覚えとく。……でも、外の人は、みんな卑劣で残酷だって聞いたから」
「どんな偏見だよ……。誰に聞いたんだ」
「エルクっていう、育て親。あと、書斎の本」
「わかった。そこの嬢ちゃん、ひとつ教えてやる。百聞は一見にしかずって言ってな、実際に見ると真実が分かるんだよ」
「僕、男なんだけど」
エミリオは不服そうに唇を尖らせる。
「え、まじ？」
男は目を見開いてエミリオに顔を近づけた。まじまじと見つめられては、エミリオも心穏やかではいられない。耐えられなくなって、俯いた。
「男、ねえ。男装した女の子かと思ったよ。悪いな」
ぺしぺしと、頬を叩かれる。頭を撫でられ、ぺたぺたと胸板を触られる。
「あんまり触られても、困る」
「おお、悪いな」
「本当に悪いと思ってるの？」
「思ってる思ってる。……しっかし、なんでここに来たんだろ？ま、いいや。じゃ、お邪魔しましたっと」
男は窓枠に足をかけ、エミリオが止めるのも聞かずに飛び降りた。
慌てて窓から外を見下ろすが、飛び降りた本人は大したことなさそうに、屋敷の門をくぐり抜け、外へと戻っていった。

「……なんだったんだろう」

エミリオは、突然来た訪問者に少し辟易しながら、呟いた。

外の人（後書き）

突如現れた謎の男。外を知らないエミリオにとっては、恐怖以外の何者でもないわけです。エルクに怖い生きものだって教え込まれましたから。

焦がれ始めた

ある日突然現れた外の人間は、もうここにはいない。あの時に、少し会話しただけで彼との関係はそれで終わった。もう、彼と会うこともないだろう。この屋敷にはエルクの結界が厳重に組み込まれていて、本来なら誰も出入りできないのだ。それができてしまったのは、おそらくエルクが留守にしてしまっていたために、結界が少し弱くなってしまったのだろう。あの旅人は、偶然にもその隙間を通り抜けてしまったのだ。もうエルクは帰ってきているし、結界が緩むことなく作動する。あの旅人は、もう出入りもできないだろう。

エミリオには、なんだかそれが少しさびしかった。もともと、生まれた時からずっとこのお屋敷にエルクと二人きりで暮らしていたから、それが当たり前のように感じていたが、旅人に会ってからは変わった。外に興味を持ち始めた。

本とエルクの話だけに満足できず、自分の目で外の世界を見たいと思うようになってしまった。好奇心は収まることを知らず、それどころかどんどん拡大していく。この好奇心を、見て見ぬふりはできなかった。同時に、探究心や好奇心を抱くことが罪悪であることも、エミリオは知っていた。エルクは、エミリオが知恵を持つのを好まない。知識を得ることはできても、そこから先へと自分で考える力を、エルクは毛嫌いする。

（わかってるんだけどね）

エミリオはベッドにぼすんと倒れ伏した。今朝に干した毛布は心地よい。そのまま、顔をうずめた。

（外に出たいって言ったら、怒るかなあ）

知恵をつけた外の世界は、悪であるとエルクは言った。それを正直にエミリオは信じていた……外の世界の者と接触するまでは。

また、門を眺める。エルクのいるこの屋敷に、出入りできるのは誰もいない。エミリオは出たこともない。

（外に出たら、あの人みたいな人がいっぱいいるのかな）
風と共に現れ、すぐに去ったあの男。最初は条件反射で抵抗していたが、だんだん警戒が解け、あの男は悪い人間ではないと感じた。
（外の人って、それほど悪くもないんじゃないかな）
考えることはするが、それをエルクにはいうまい。話したら、きついお仕置きを食らうのだ。今までは素直にエルクのいうことを聞いていたが、知恵を持ったエミリオは、もう手におえない。エルクの手中に収まることはない。
エミリオは、自分がエルクに飼われているという自覚がなかった。ただ、外に対する好奇心が強く育ったのだ。
その心が行き着く答えは一つ。
（また、会いたいなあ）
待ち焦がれる心を覚えた。
エミリオは、また門を眺める。エルクが新しく持ってきてくれた本も、なんだかつまらない。
外は、きっとすごいとこなんだろうなあ、と漠然とした羨望を浮かべつつ、エミリオは窓を閉めた。もうすぐ夕食の時間だ。この空想は、エルクに知られてはいけないのだ。エルクと面向かう前に、次々と生まれてくる好奇心を自分で消化しておかなければならなくなった。苦しいことではあったが、それはそれで空想するのは楽しかった。
エルクが食堂までエミリオを連れて行く。二人分には少し大きいテーブルで、食事をする。さりげなう、聞いてみた。
「エルク、外は、怖くなかった？」
「大丈夫ですよ。僕は自分の身を守れますから」
「そう？　エルクって、僕より身長低いし力もなさそうだから、ちょっと心配」
「なんですか、それ。これでも鍛えてるんですよ？」
エルクは苦笑する。
「それにしても、ずいぶん外のことを気にするんですね？」

核心を突かれ、エミリオは一瞬息が止まった。
「え、ああ、うん……ほら、外は怖いって聞いてるから、エルクは大丈夫かなって、心配して」
「心配には及びません。僕はこれでも強いですから」
ごまかせ切れただろうか。エミリオは嘘が下手だから、余計なことを口走ってボロを出す恐れがあった。
「うん。なら、いいんだ。もしエルクに何かあったら、僕は一人になるでしょ？」
「かわいらしい心配ですね。僕は、ずっとエミリオのそばにいますよ」
一人になることの恐怖は、嘘ではない。一人になったら、エミリオは何もできないのだ。今までエルクに任せきりだったから、本来なら自分でやれることもできない。もっとも、そんな風に育て仕込んできたのはエルクだが。
エミリオは、外の世界に、確実に焦がれ始めた。

焦がれ始めた（後書き）

ラプンツェル第四弾。お待たせいたしました。
連載が滞りかけていたのを阻止できてよかった（笑）

旅人、ふたたび

こんこん、と窓が鳴る。エミリオは素直に窓を確認すると、見覚えある外の人間が窓をたたいていた。

「あ」

ここ一帯はエルクの結界で守られているというのに、なぜここまで入ってこれたのか不思議だった。そう思ってはいたが、また会えた安堵感のほうが強かった。だから窓を素直にあけて、彼を部屋に入れた。

「どうして入ってこれたの？」

「あ？　普通に入れたぞ」

「うそ。だってエルクの結界が張ってあるのに」

「つってもなあ、入れちまったもんはこれ以上説明のしようがないだろう」

それもそうか、とエルクは無理やり落ち着いた。

エルクに見つかるとまずいので、エミリオは彼がいつでも逃げられるような準備はしておいた。隠れ場所も拙いながらに整えた。いろいろと、外の話を聞きたがっていたため、彼との逢瀬を止められるのを避けたかった。

「実はちょっと人に頼まれてんだ」

「なにを？」

「この屋敷にな、十五六の子供がいないかって」

「僕くらいの子？　エルクは十四くらいだけど。なんで」

「探してるんだって。昔さ、村から逃げてきた兄弟二人が子供を拾ったんだよ。そのうち一人が大けがして、魔女に拾った子供と引き換えに治してもらったんだったかな。連れてかれた子供は、生きてれば十五歳くらいじゃないかって。俺はその子供を探しにここまで来たんだ。もしかしたら、お前がその魔女につれてかれた子供なんじゃねえの？」

彼は名前も名乗らずに自分の仕事や聞いているエミリオの出生の可能性をすらすらと述べる。
エミリオは実感がわかない。生まれてこの方、この屋敷から出た経験がない。外に自分の家族がいるとは考えもしなかった。
唐突すぎる。エルクのことは信頼しているし、これまで自分をないがしろにするという行為に及ばれたことはない。むしろ大切に育てられていた。
自分はどうすべきなのだろう。今まで育ててくれたエルクを捨てて家族のもとへ帰るのか。それともずっとここで死ぬまでエルクと一緒に暮らすのか。
「俺は、おまえがその子供だって考えてる。頭悪いしバカだからさ、根拠はないけど。噂の魔女屋敷ってきっとここのことだと思うんだ。魔女の住む屋敷は普段は入れないっていわれてる。でも俺は偶然にも二度入れた。たぶん俺には魔女の結界が通じないんだ。そんなとこに入れるんなら、そこにいる子供を外から連れ出すことだってできるさ」
「僕、ここからでなくちゃだめなの？」
「無理にとは言わないけど、せめて元気で暮らしてることくらい、会って伝えたほうがいいんじゃないか？」
「外の人間が、僕をとっちめるためについてる嘘だとしたら？」
「なんつー妄想……」
彼はため息をついた。
「大丈夫だよ。俺は実際会った。悪い奴じゃない。それどころか表彰もんのお人よしだよ」
「でも……」
「俺がついてってやるって。一度会うだけでいい。それ以上は強要しないさ。外がなじまないんだったらこっちに帰ってもいい」
「うん。……ちょっと考えさせて」
エミリオは、彼にまた名前を聞くのを忘れ、名も知らないまま、彼と別れた。

旅人、ふたたび（後書き）

そろそろ後半かなあ。こっちのシリーズはもうすぐ完結となります。
どうかのんびり付き合ってやってくださいませ。

監禁

自分が、もしかしたらエルクとは別の人に拾われた孤児で、拾った人が探している者だという可能性をあの旅人につきつけられ、エミリオはここ数日穏やかじゃなかった。このことを受け入れるということは、要するに今までの価値観がすべてひっくり返るようなもので、今まで手塩にかけて育ててくれたエルクの献身を裏切るおそれも出てくるからだ。

一番の解決方法は、エルクに直接聞いて真実を確かめることなのだが、いつも一歩前に出ることができないでいる。おかげで数日も時間を費やした。エルクに心配かけてしまったと思う。

思い切って聞けはしないか。向こうから切り出してくれれば少しは決心もつくと思うのだが、それを相手に望むのは勝手かもしれない。

「エミリオ、ちょっといいですか」

「うん。どうしたの？」

エルクは昼食をとって少したったあと、ふいにエミリオの部屋を訪ねてきた。いつもの穏やかな表情がない。真面目な面持ちで、じっとエミリオを見つめている。

「……どうかした？」

「エミリオ。あなた、最近外の者と接触しているんじゃありませんか？」

隠し事を急につきつけられ、エミリオは固まった。

「どうなのですか」

「え、その、いきなりなんで」

「気になりまして」

エミリオの考える時間は十秒ほどしか稼げなかった。

エルクには、外の人間とは一切の接触を禁じられていた。それがたとえ理不尽であったとしても約束は約束。破ったエミリオに責任

があるわけで、後ろめたいのは当然。
何より怖いのは、この約束を破ったらどうなるかという罰則を知らないことだった。何をされるかわからない恐怖というのは、武器や拷問器具をちらつかされるに足るほどの恐怖だろう。
「で、どうなのですか。僕は答えにくい質問をしてるわけじゃないでしょう」
黙っていても、この重い空気がそのぶん長く続くだけだ。ならば、白状してきちんと誠意を見せれば、エルクも見逃してくれるだろうか。
「その、ね……」
「はい」
「偶然、本当に偶然なんだよ。二回くらい、……会ってた」
「二度？」
「うん。どっちも偶然」
「そうですか」
エルクはそれっきり何も言わない。怒っているのだろうか、あきれているのだろうか。何を考えているんだろう。心中を読み取れないからエルクがどんな感情を抱いているにせよ怖い。
僕は、何をされるの？
エルクの溜息で、余計に恐怖が増した。
「わかりました。偶然で、あなたの落ち度はそれほどない。僕の結界が弱くなっていたことも考慮のうちに入れないといけませんしね。……でも」
許しは得られただろうが、そのうえでの罰は受けなければならないのだ。
「約束を破ったのは事実ですから、ちゃんとお仕置きしなきゃですね」
ほっとできない。エルクの目が、狂人のように光っている。具体的に何をされるかわからないが、おそらく恐怖から逃れることはできない類だろう。

ぐっと手をつかまれ、どこかへ連れて行かれる。今まで気にも留めていなかった下へと続く階段を、延々と降りていく。この下には何があるんだろう。抵抗もできない。恐怖にすくんで伸ばされた手から逃れる防衛本能が麻痺していたのだ。

いったいどこまでこの階段は続くのか。エルクの持っている明りだけを頼りに周囲をそれとなく探ってみたが、何もない。窓もない。ただ煉瓦が不気味に連なっている。

ようやく止まった。エルクは強引にエミリオを「そこ」に押し込んだ。それが牢獄だと分かったのは、完全に閉じ込められた後だった。

「エルク！？　なんなのこれっ」

「お仕置きです。二度と外の人間と会わないよう、あなたにちゃんと仕込まねばならない教育とも言えます。そこで頭を冷やしなさい」

「ていうか、ここ、なに？」

「ここはかつて、火刑が決まっていた魔女たちを閉じ込めておくための監獄でした。ここは暗くて静かで、あまりに何もないところだからか、火あぶりにされる前に発狂して死んでいった魔女も少なくないという逸話もあります。まあ、あなたなら大丈夫でしょう」

「大丈夫じゃないよ！　出して！」

「あなたが反省したころに、出してあげますよ」

鍵をかける音がする。エルクの足音が遠のく。ここには、エミリオ以外誰もいない。

魔女が発狂したらしいその場所に、自分はいる。自分もその魔女のようになってしまいそうでいやだ。

早くエルクが来てくれればいい。それだけを祈って、エミリオは監獄の中で身をちぢこめていた。

監禁（後書き）

ああ、ついに来ちゃった、監禁ネタ……。本当はかなり前から思いついていたのですが、ここまでたどり着くのが長かったです。

ラプンツェルは完成した

ぎい、と重苦しい音を立てて、分厚い扉が開いた。太陽を浴びることとも時計の時間を告げる音ともしばらく離れていたエミリオは、どれくらい時間がたったか、今が昼なのか夜なのかもわかっていない。

「反省しましたか？」

答える気力もなかった。ただ、かすかにぼんやりとうなずくだけだ。エルクは無気力状態のエミリオを支え、魔女の監獄から屋敷へと戻る。エミリオの状態を一通り確認して、笑んだ。

エミリオは、もう外へ出るという発想をしなくなる。そんな確信があった。

「さて、まる二日、飲まず食わずでしたから、何か食べてください。あまり胃に重くないものを作りましたから」

「……うん」

エミリオに、思考能力は欠けている。というより、屋敷の外へ出てはいけないという戒律に疑問を抱かなくなった。もしも外への羨望を覚えたら、またあの監獄へ監禁されることが分かっているからだ。

エルクに差し出されたスープを、エミリオは気だるげに口に運ぶ。食事の楽しさがない。食べなければ死ぬから、最低限食べるだけだ。

異国の旅人が、自分の兄弟の存在を教えてくれたことも、もうエミリオの心には残っていない。覚えてはいても、興味を示さなければそれは忘れているのと同じだ。

「あれ、もういいんですか」

「いらない。おなかすいてない」

「そうですか。明日は、もう少し食べましょう。体が持ちませんから」

エルクはあまり無理強いせずあっさりと引いてエミリオの部屋か

ら出て行った。
エミリオは、興味を持たない。ただの人形に、ラプンツェルに成り果てた。エルクの思い通りの人間になった。

「お、いたいた」
顔を確認せずともわかる、外の声。窓のふちに足をかけ、またこの部屋に入り込んだ外の人。この人と会ったがために、監獄に入れられた。
その事実も知らず、彼は不用心にエミリオに触れてくる。エミリオは、頬に触れる手を無意識に払った。
「やだ」
「あ？」
この子供の行動に、小さな疑惑が生じた。外の人間に恐怖を抱きはしていたが、こんな拒絶をしたことがない。
最後に自分と会ってから、確実にこの子供に何かあった。
「おい、お前。なんかあったのか？　……あれ？」
力なくではあるが、自分と距離を置かんとしている。人の話は最後まで聞けと教育されていないのか。
「おーい、一人にしないでくれよう」
答えがない。部屋から出ようとさえしている気がする。無理矢理は避けたかったが、相手に人の言葉が理解されない以上やむを得ない。
「逃げるなこら！」
「ひえ！？」
強く子供の腕をつかむ。明らかに、初めて会った時と同じくらいの態度に退化していた。何かあった。確実に何かされている。
それを聞くのは、この小さい子供には無理そうだ。
「なあ、お前の保護者ってのはどこにいる？　教えてくれればひどいことはしない」
「……もうすでにひどいことしてるのに？」

「あーよかった、言葉通じた。それよりいいからそこにつれてけ」
なるべく優しい声で頼んでみた。仲間から、よくドス聞きすぎて怖いと言われるため、優しい声色を作るのに苦労した。
この子供は、頼みを飲んでくれるだろうか。たぶん恐怖に屈したなら脅迫すれば従ってくれるだろう。あるいは恐怖が強すぎて何もできないことがあるかもしれない。
「連れてく。だから腕、痛い」
「……あー、悪い」
この少年は、どうやら自分の頼みを聞き入れてくれるようだ。
望みは、まだ絶たれていないようだった。

ラプンツェルは完成した（後書き）

もうそろそろ最終回近いです。次で終わりになる予定です。

ラプンツェルはさよならを言った

エルクのお仕置きで、せっかく仲よくなった（と思われる）外の人間にすら、エミリオはこれ以上ない恐怖を覚えた。その恐怖は外の人間に対してではない。人間と関わった罰として、またあの牢獄に閉じ込められることへの恐怖なのだ。

あんなことをされても、エミリオはエルクに恩を感じていたし、あのおかしな人間にも恐怖や嫌悪を抱いているわけではない。欲張りな感情だが、エミリオはエルクをとるかあの人間をとるかと迫られたらどちらもと選択する。

エルクの部屋の方から、口論が聞こえてきた。怒声はあの人間のものだろう。対するエルクはずいぶんと落ち着いていた。エミリオは不安になって、ドアのすきまから二人の言い争いを見守っていた。

「なんであいつはあんなに外の人間に怯えてんだ」

「僕が教えましたから。怖い人種だと」

「わかんねえだろが。お前、一度でも外に出たことあんのか？」

「ありますよ。僕にとっては恐怖の象徴でしかありませんでしたから、こうして引きこもっているわけです」

「お前がいつの時代の生まれだかは知らん。けどな、少なくともこの屋敷の中にいる子供の兄弟はそんな奴じゃねえんだよ」

「そうですか。まだ生きていたのですか。強い人間ですね」

「その兄弟があいつに会いたがってるんだよ。一日だけでいいからあいつを貸せ」

「お断りします。そもそも、これは彼らの選んだ道なのですから。僕はあの時負った怪我を治すことと引き換えにあの子を引き取りました。なのに今更会いたがるなんてご都合主義もいいとこです」

「一日だけだっつの！　それ以上は強制しない。あいつの好きにさせりゃあいい」

「だめです」
「お前……あいつを自分の人形にして楽しいか？」
「楽しいですよ。親として、育てるべきところは育てました」
「ふざけるな！！　あいつはお前の人形なんかじゃないんだよ！俺たちと同じ人間だ！　お前のゆがんだ教育であいつの将来を捻じ曲げるな！」
「……ずいぶんこき下ろしてくれましたね。侮辱ととりましょうか。今、ここであなたの息の根を止めておいたほうがよさそうです」
エミリオは、はっと息をのんだ。エルクが魔女の一族であることは知っている。その魔女は、人間よりも高度な古代魔術を習得している。エルクも例外ではない。そのエルクが、物騒なことを言い出した。
止めなければ。そう体が感じて、頭で何をすべきか判断するより、体が直感だけで動いた。

「待って！！」

ドアをけ破る勢いで開け、二人の間に割って入る。
「エミリオ……？」
「なんで、なんでなかよくなれないの？　外の人間は怖いものって言ってたけど、この人は全然違うよ。怖くないよ。エルクだって、そりゃ怒れば怖いしお仕置きは泣きたくなるくらい怖かったけど、悪い人じゃないよ。どっちも悪くない！　なのになんで二人とも怒るの？　仲よくできないの？」
エミリオは二人を交互に見ながら主張する。
「僕、その兄弟に会ってくる」
その発言に驚愕したのは、エルクだった。
「だめです！　危険すぎます」
「うん、だからさ。エルクも一緒に行こうよ」
「……え？」

「もう、何十年もここから出てないんでしょ？　これだけ月日が経てば、怖い人間もきっと減ってる。もし怖い人に会っても、エルクは強いから僕を守れる。だから、いいでしょう？」
　エミリオの優しい説得になお、エルクは躊躇していた。いくら高等な古代魔術をつかえても、それが万能なわけではない。これだけの月日が経った今、古代の力が現代に通用するかもはなはだ不安だ。
「大丈夫だよ、エルク。この人は怖い人じゃない。僕もいるよ。だから、外に行こう？」
「エミリオ、あなたは……僕を、置いてけぼりにしないでくれるのですか？」
「え、なんで？　エルクと一緒がいいのに、エルクに留守番はさせたくないよ。それとも、僕といっしょは嫌？」
「そんなわけありません！」
　エルクは強く否定する。
「一緒なら、へいきです。外に、出ましょう」
　数十年間、屋敷に引っ込んでいた魔女は、外出を決意する。

　結局、エルクは一人になるのが怖かった。だからエミリオに外の人間が恐ろしいと吹聴した。そうすれば外に出たくもならなくなるだろうと考えて。当然、外の人間がそんなに恐ろしいものではないのは分かっていた。たびたび外に出ていて、自分の目で見ていたのだから、否定の仕様がない。
　エミリオを大切に育てたのは本当だ。ただ一か所だけ、育て方に間違いがあった。
　彼は、エミリオが自分から離れることのないように、エミリオの牙を抜いた。そうして無力化したエミリオは、エルクに依存せざるをえなくなる。籠の中の鳥を育てた。

「ねえねえ、僕を拾ってくれた兄弟って、どんな人？」
　道中、エミリオはその男に聞いた。

「何回目だ、その質問」
そう口では呆れながらも、彼は答えてくれる。
「いいやつだよ。兄のほうはお調子者でアホだけど、弟はその分しっかりしてるな、うん」
「確かに。あの時も、弟のほうは随分としっかりしていました」
エルクは彼の意見に強く首肯した。
「それって、僕がまだ生まれて間もないころでしょ」
「ええ。三つ子の魂百までとは言いますが、その通りになるとは。実際に会って確かめたいですね」
「……あ」
ふと、エミリオが抜けた声をだす。
「どうした？」
「まだ、名前、聞いてなかった」
「あー……」
その人間は、思い出した。名前がなくても何ら問題がなかったから、自分から名乗ることがなかった。
「僕は、エミリオ。君は？」
「昴だ。藤枝昴？」
「ふじえだ？」
「名前は昴」
「昴、っていうんだ」
「お前は、エミリオね。……じゃリオンって呼ぶぜ」
「リオン？」
「人間ってのはな、ダチとは愛称で呼ぶもんだ」
「ダチってなに」
「あー、友達って意味。それもわからないくらいの世間知らず坊ちゃんなのかお前……」
昴はがっくりと肩を落とした。
「あ、なんかバカにされた？」
「してないしてない」

道は、もうすぐエミリオを拾った兄弟のもとへとたどり着く。
エミリオは、エルクと、ずっと手をつないでいた。

ラプンツェルはさよならを言った（後書き）

連載ようやっと終わりました。長かった～……

ここまでお付き合いください、本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2707q/

ラプンツェルにさよなら

2011年6月10日16時10分発行